

Title	堀江博士著 続編 世界の経済は如何に動くか
Sub Title	
Author	増井, 幸雄
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1922
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.16, No.6 (1922. 6) ,p.880(140)- 883(143)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19220601-0140

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

新刊紹介

堀江博士著「續世界の經濟は如何に動くか」

か

四六版三百六十四頁
定價金一圓八十錢
發行所 岩波書店

堀江博士は昨年末「世界の經濟は如何に動くか」なる書物を公にして歐洲戦後内外諸國に現はれたる經濟上の變局特に經濟立國問題、戦後經濟問題、勞働問題等に就ての所見を披瀝せられ、通貨金融等の方面に關するものに就ては遠からず續篇を以てその所見を披瀝せらるべき旨を約束せられたが、その約束は意外に早く實行せられて早くも四月下旬を以て「續篇世界の經濟は如何に動くか」が公にせられたのは多とせざるを得ない。さきに本書の前篇によつて啓發せらるゝ所ありし者、宜しく本書一本を備ふべ

政治上の壓迫から經濟社會を解放しなければ民生の全きを得しめるの望みなきことを述べたる後「歐洲諸國の經濟社會は當分その面目の恢復を告げる望みは絶無である……軍備の縮小が勢力や物資を不生産的の事業から解放し財政の整理によつて通貨の膨脹する勢が止まり生産力の増進によりて通貨や信用を支持するの基礎となるべき富の増進した時こそ經濟復興の機運を開くものと答へるの外はない」と断じて居る。而して此の第一章が本書の前半を占むる世界の經濟に關する所論の云は、基本論・概括論たるの地位に在り他の諸章は之が詳論細説たるの地位を占めて居ると見得るのであつて、第七章で通貨整理の必要なる所以を論じ、第二章では膨脹せる通貨整理の爲めには政府紙幣の整理従て財政の整理の要あり軍備縮小と國際的援助とを要すとなし附録に於て通貨整理上に於ける銀の地位を詳説し、第五章では武備の縮小・經濟的帝國主義の終末によつて世界の經濟は解放せらるゝの

きである。

本書載する所は「歐洲經濟社會の恢復期と恢復策」「ブラッセル國際財政會議の報告書」(附録、「最近數年間に於ける銀價の變動」)「華盛頓會議と我立國策」「軍備縮小と失業問題」「武力の競争から國際經濟の競争へ」「國際經濟會議の成敗」「通貨整理問題」「米價問題と國民經濟」「小賣商の暴利問題」「農村に於ける地主對小作人爭議」の十章であつて、その内容は自ら、第一、二、五、六、七の諸章より成れる世界の經濟に關する部分と、その他の諸章より成れる日本の經濟に關する部分との二つに分たれ得る。

歐洲戦後の世界の經濟は如何に動くかといふことは畢竟戦争によりて破壊攪亂せられたる世界の經濟は何時如何にして恢復するかといふことに外ならないと見ることが出来る。然らば此の點に關して著者は如何に觀察するか。著者は第一章に於て戦時戦後の經濟上並に財政上の困難の事情を精細に叙し遂に軍備縮小を通じて財

途に向ひしにも拘らず他方に於ては各國とも經濟戰の準備を急ぎつゝあることを叙し、第六章では通貨問題の解決に必要な國際的協同の諸問題を論じて居る。

轉じて日本の經濟に關する部分を見れば、軍備縮小反對論を駁し門戸開放主義に賛し特に對支那問題を拉し來つて或る條件の下に滿洲山東に於ける特殊の地位を拋棄せよと論じ(第三章)、不景氣と軍備縮小とより生ずる失業者續出に就ては皮相なる失業者歸農論や安價な樂觀論を一蹴して失業の影響は本邦に於て特に一層不良なものあることを述べ對策五個を擧げたる後「失業問題の解決は煎じ詰めると結局勞働權の承認を以て大團圓とする」と論結し(第四章)、米價政策の要訣は米價變動の幅を小ならしむるに在りとなし現に行はれたる又は唱道せられつゝある諸政策を貶して著者の是とする諸政策を提言したる後、根本的の政策としては米の國際的商品化を以て第一となすと断じ(第八章)、卸相

場が下落しても小賣相場の下落せざる根本の原因を挙げ對策としては同業組合の解散進んでは重要物品の最高價格公定を提唱し、政府及び公團體の無策を難じて消費者の自助手段を勧めて居り(第九章)、近時地主と小作人との間に於ける爭議頻發の原因は經濟上及び思想上に於ける時勢の變に基づくことが少くないが結局は政府の誤れる經濟政策に因由すとなし、爭議の爲めに農業衰頹の機を特に速かならしめざるむが爲めに米價の平衡と地主小作人間の分配公正とを計り進んで一部土地の國有を斷行することが必要であると説く(第十章)。

以上記す所は素より本書の内容の一部を極めて、at random に摘記したものに過ぎないのであつて、是等の結論だけを見るときは著者の眞意を捕捉すること能はざるの虞れがあり、従つて是等の點に關しては世間或は多少の異論なきを保し難きものもあらうが、著者が如何にして斯る結論に達したかの筋道並にその結論の當否

に關しては親しく本書を讀む者に於て自から首肯せらるゝ所があらうと思ふ。同一の論旨が諸所に於て繰り返されて居り内容は必ずしも秩序整然たるものではないが、これは大體に於て論文集たるの性質上免れざる所であるとしなければならぬ、加ふるに此の點は、特に世界の經濟に關する諸章に於て金融及び通貨の方面に關する著者年來の蘊蓄に加ふるに戰時戰後の事情に關する最近までの該博精緻なる研究の收穫を以てして居るが爲にその内容を充分に消化し切れぬといふ感を懐かせるほどに豊富であり、従て所論もそれだけ堅實の度を増して居るの一事によつて充分に償はれるであらう。若しそれ日本本の經濟に關する諸章に至つては研究といふよりも時論といふべきものであるだけに(個々の論點に就ては世間或は異論があり得るかも知れないが然し)文章に熱があり筆も一層自由に運ばれて居つてその筆致人を魅するものがある。世間では著者を以て近年甚しく左傾したと噂し

て居る者もあるやうであるがその所説は決して偏見に充され一部階級の利益を辯護主張する偏頗な議論に類することなく、身を高所に置き經世的見地から觀察論斷せられて居るのであつて、唯その間に、國威國力の發揚よりも國民福利の増進を以て一層重しとするの見地が窺はれ、その所信を展ぶるに端的にして苟もその見以て非なりとする所のものを難するに際しては筆端頗る辛辣銳利なるものがあることが人の眼を惹くのみ。對外商業政策上に現はれたる著者往年の經濟政策的立場たる自由主義は、著者近年の經濟上社會上の論議の傾向から見れば恰かも弊履の如く棄て去られたかの如くに感せしめらるゝも、その必ずしも然らずして米の國際的商品化を説かるゝが如きは、窮屈なる一個の主義に束縛せられずして頗る自由なる立場に身を置かるゝに到りし所以と解すべきであらう。往年は自由貿易を辯護するに、戰時食糧品の供給は強力なる海軍によつて後援確保せらるべしと

いふを以てし海軍擴張論者たるの立場に在りし著者をして、同じく主要食糧品に就て外國に依頼せよと論じつゝ、今や却て軍備の縮少を説くを得しむるもの、是れ時勢の變と云ふべきか。終りに、本書に屢々散見する誤植をば再版に際し更に嚴密に校正するの勞を惜まれざらむとを希して紹介の筆を擱く。妄言多罪。(増井幸雄)

原靜氏 銀行實務誌

菊版九〇六頁同文館發行
定價六圓三十錢

本書の著者原靜氏は明治四十年我大學部を卒業して、直に三井銀行に入り、同行に勤務すること、十數年に及べり。氏が在塾中、學生として優秀の成績を示したるのみならず、研究心の極めて旺盛なりしことは、今日尙は余の記憶に存する所なるが、銀行の實務に鞅掌して、之を研究し又改善せんとする氏の志業は遂に氏をし